

慶応3年(1867年)の図面(岩国徴古館蔵)

岩国市

／クローズアップ／

# 干拓の歴史

人々のねがいと共に拓かれた岩国の干拓を今、再発見。



寛文8年(1668年)の図面(岩国徴古館蔵)



慶応3年(1867年)の図面(岩国徴古館蔵)

編集・発行／岩国市教育委員会文化財保護課 岩国市横山2丁目6-51  
 問い合わせ ☎0827-28-5353

# 海に土地をつくる！干拓の歴史を探検する

## どうして新しい土地が必要になったのか？

耕地の少ない日本では、山野・河海を開発し、耕地を新たに作りだすことが課題とされてきました。特に支配階級の武士にとっては、納めさせた年貢の米を主な元手にして政治を行い、また生活もしていたため、米を作る水田を増やすことが目指されました。

なかでも江戸時代の岩国では、たくさんの年貢米が必要となりました。

- ・理由① 関ヶ原の戦いを経て、吉川家は領地を出雲から岩国へ移封され、石高が14万石から3万石に減封された。
- ・理由② 新しい領地となり、城・居館の建造をはじめ、城下町の建設が必要となった。
- ・理由③ 江戸城の建設などの御手伝い普請や大坂冬の陣・夏の陣などの軍役に課され、出費がかさんだ。

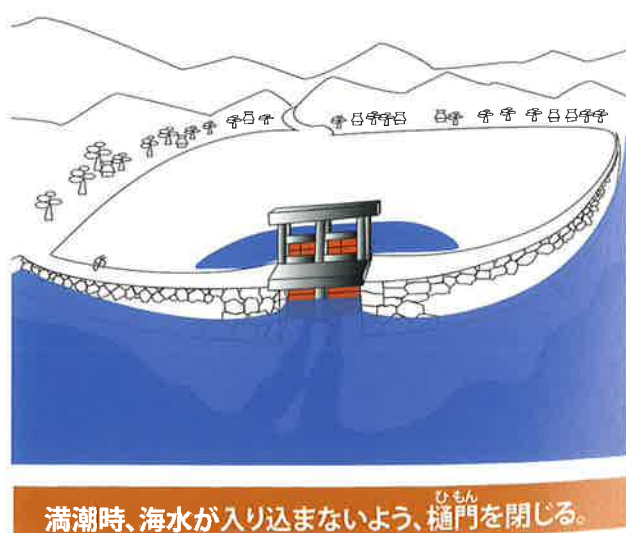
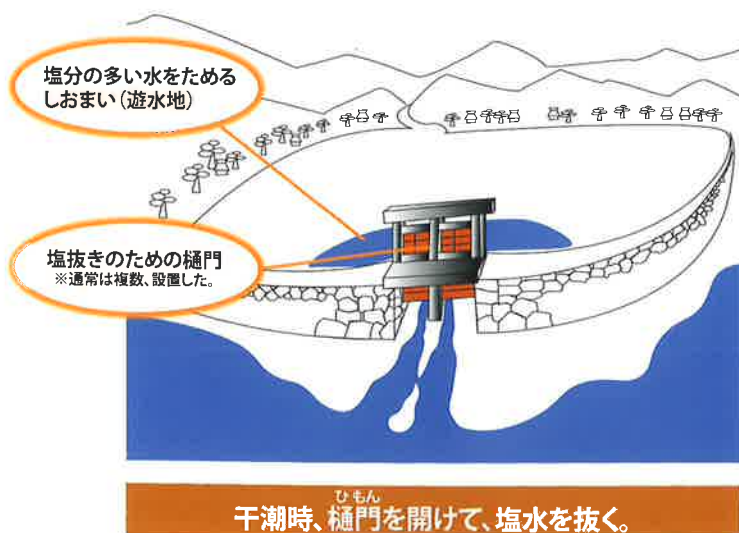
## どうやって新しい土地をつくりだしたのか？

江戸時代になると、徐々に社会は安定し、海の近くでは、土木技術の進展とも相まって、あたらしい土地が造られるようになりました。瀬戸内海に面した岩国でも同様でした。

しかしその方法は、江戸湾のように土砂や廃棄材などを埋め立てるものではなく、干して（水を抜いて）拓く（土地を造る）干拓でした。

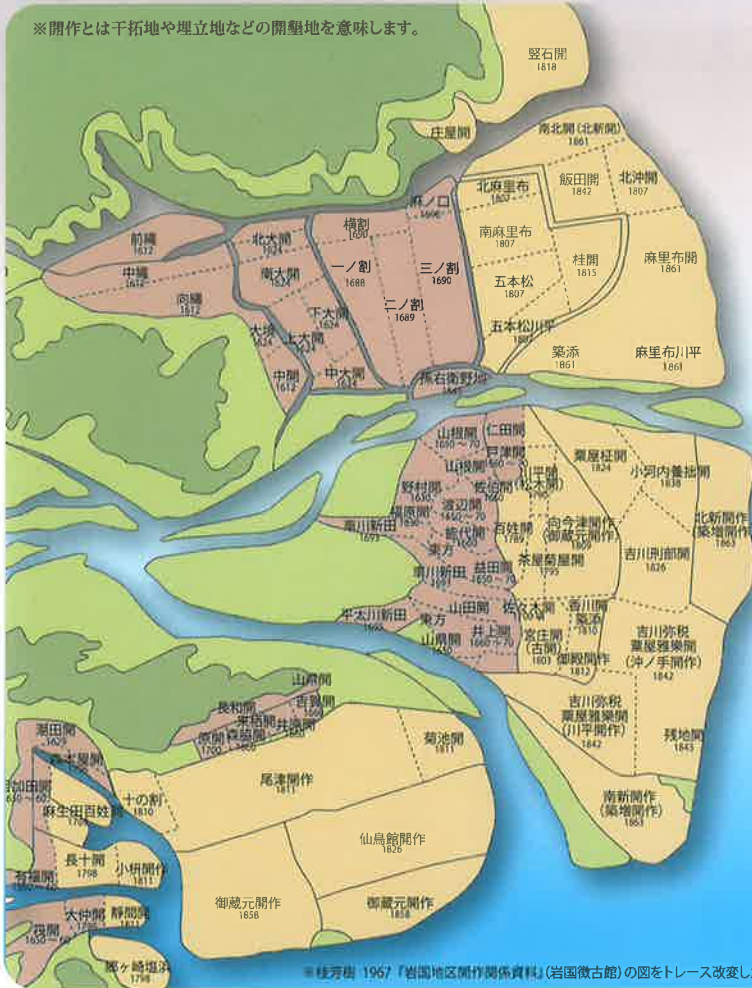
大規模な干拓においては、堤防を石垣で補強するので、満ち潮のとき、舟で石材を運び、干潟田などの水深の浅い海に投げ入れます。そして、引き潮のとき、木杭を打ち込み、土を盛り、突き固めて芯とし、表面に石垣を組んで堤防を築き、海を囲んでいきます。最後に、もっとも潮が引く日を選んで、一気に堤防をつないで閉じます（潮止め）。※土盛りの堤防で海を囲む小規模な干拓も数多く行われました。

海の底だった干拓地には塩分が残っているため、そのままでは稲が育ちません。そこで、堤防の一部に樋門（水門）を設け、内側にしおまい（遊水地）を掘り、潮の満ち引きを利用して、樋門から塩分の多い水の排出を繰り返します。やがて水底が干上がり、塩分も減少してようやく耕作地になりました。



# 干拓地の時代ごとの特色

岩国の江戸時代の干拓を時代ごとに色を塗って、特徴をまとめてみました。



## 江戸時代前期(1600年代ごろ)

江戸時代前期は、吉川家の直営の公共事業として、たびたび大規模な干拓が行われました。干拓地の大半は水田にして、米と麦を作りました。

## 江戸時代中期(1700年代ごろ)

干拓に適した土地(広い浅瀬)が少なくなり、相当な資金をつぎこまないと干拓ができなくなってしまったことなどから、干拓が急減した時期です。

## 江戸時代後期(1800年代ごろ)

町人などから出資を募る官民共同の干拓や、家臣、町人、農民などによる民間資本の干拓が増えました。換金性の高い商品作物(麻、木綿、蓮根など)を作る畑地も増え、塩を作る塩田も現れるようになりました。

- あさ・麻……夏の高級衣料や蚊帳の生地、漁労道具などの原料となった。
- もめん・木綿……18世紀の終わり頃、室木村の村本三五郎が備中(現在の岡山県)から綿の種を持ち帰り、塩分に比較的強い木綿作りが盛んになった。とりわけ岩国の木綿は高品質とされ、他領へも多く販売され綿織物の原料となった。※綿の実から採れる繊維が木綿です。
- れんこん・蓮根……岩国でもわずかながら江戸時代前半から作られていた。村本三五郎が持ち帰った蓮根が干拓地に適合し、門前村を中心に一挙に蓮根畑が広がったとされる。

# 干拓地のその後

近代に入ると国全体を巨大な交通網で結ぶため、国道・鉄道が整備されたことに伴い、宅地・商業地等の開発が進み、港・空港が整備され、大規模工場が進出し、現在に至っています。

江戸時代に始まってから現在に至るまでの岩国の干拓地の歴史を探検すると、その時代の要請を受けて、干拓地が姿形を変えながら使われていることがわかります。

- 1876 明治 9年 山陽道が一等国道に指定された。
- 1897 明治30年 山陽鉄道(広島駅⇄徳山駅)の開通に合わせて岩国駅(麻里布地区)が開業し、蒸気機関車が運行した。
- 1926 大正15年 岩国港が内務省の指定港となった。
- 1938 昭和13年 岩国飛行場が旧海軍の軍用飛行場として建設を開始した。
- 1958 昭和33年 三井石油化学工業(株)(現三井化学(株))の石油化学コンビナートが稼働した。



南岩国・尾津蓮根畑



岩国駅前



コンビナートと木・岩国

周防大島出身の民俗学者 宮本常一が昭和41年(1966年)に撮影したものです。(周防大島町立 宮本記念館蔵)

【参考文献】 ●岩国市史編さん委員会 2014 『岩国市史 通史編二 近世』 岩国市 ●岩国市小学校社会科副読本編集委員会 2018 『わたしたちの岩国』 岩国市教育委員会  
 ●小野田市史編集委員会 1987 『小野田市史 民俗と文化財』 小野田市 ●桂 芳樹 1967 『岩国地区開作関係資料』 岩国徴古館  
 ●宮本常一 2014 『私の日本地図 4』 未来社

干拓の歴史にふれてみよう

# 広がる干拓地めぐり in 尾津

散策マップ

蓮田の風景に四季を感じて  
先人の情熱のこもった干拓地を  
ゆっくり散策してみませんか？



① 取水口 (牛野谷・愛宕橋付近)



② 農業用水路及び生活排水路

※耕作のためには、塩分のない真水を農業用水として引く必要があります。  
尾津の干拓地においても、遠く離れた牛野谷の愛宕橋付近から取水し、生活排水が混ざらないように分別して、大切に使用しています。



③ 尾津開作南蛮樋



④ 仙鳥館開作南蛮樋



⑤ 大樋門跡



⑥ 塩釜神社



⑨ 石積跡



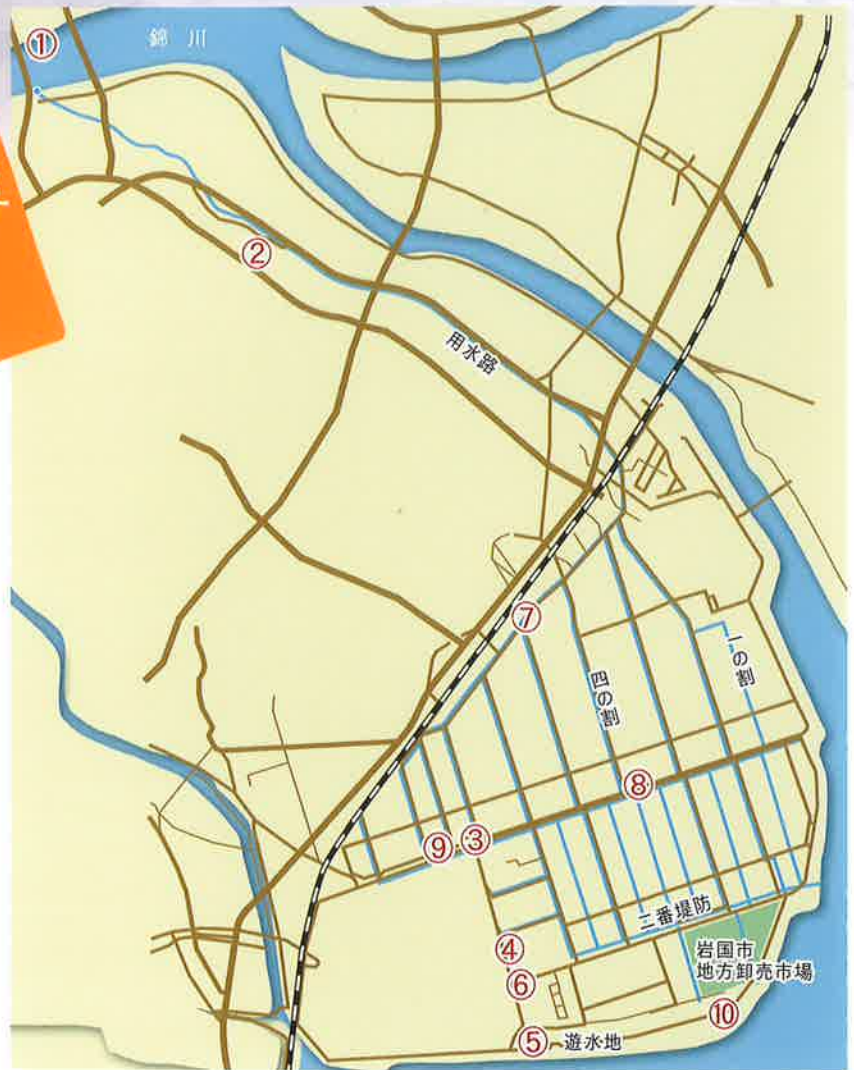
⑦ ①②からつづく用水路



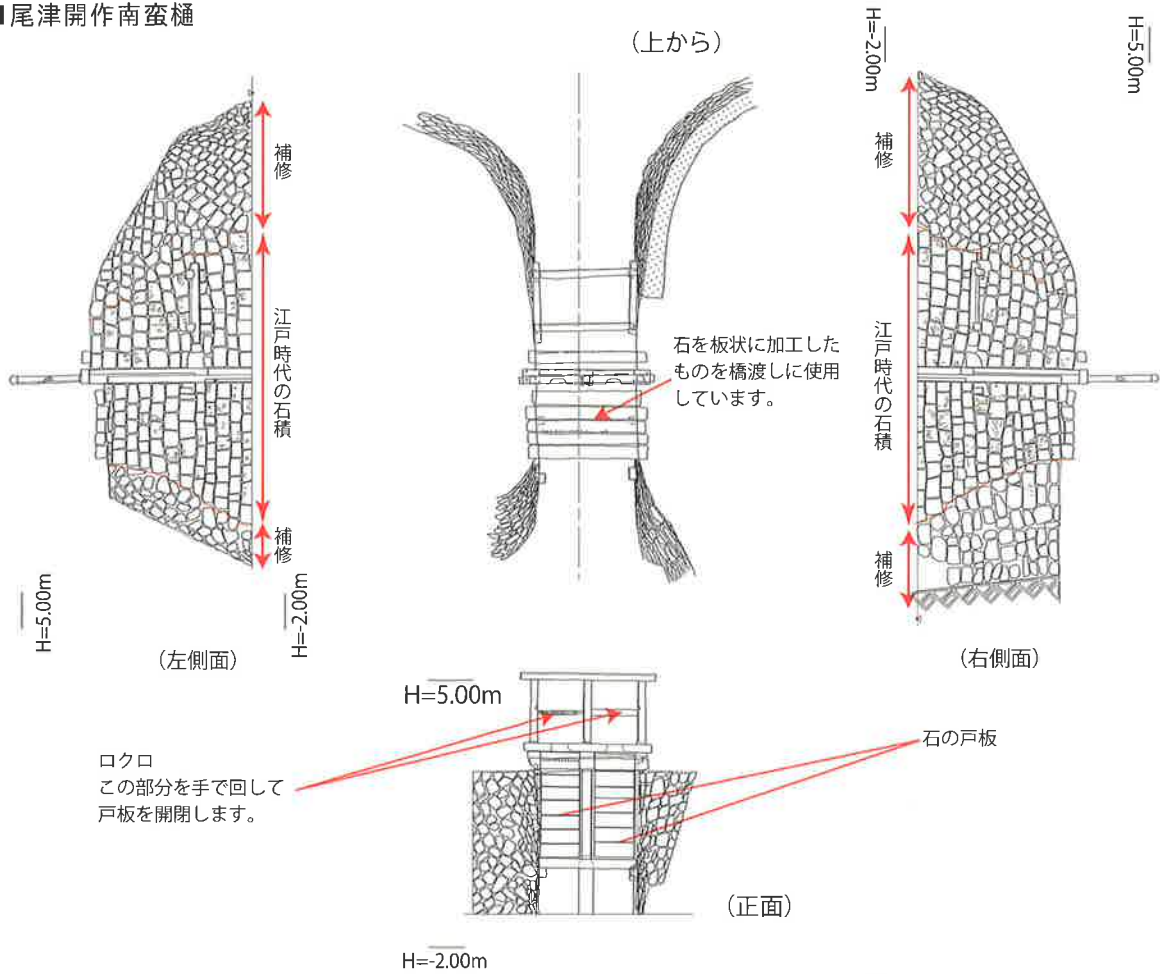
⑧ 三番堤防 (尾津開作)



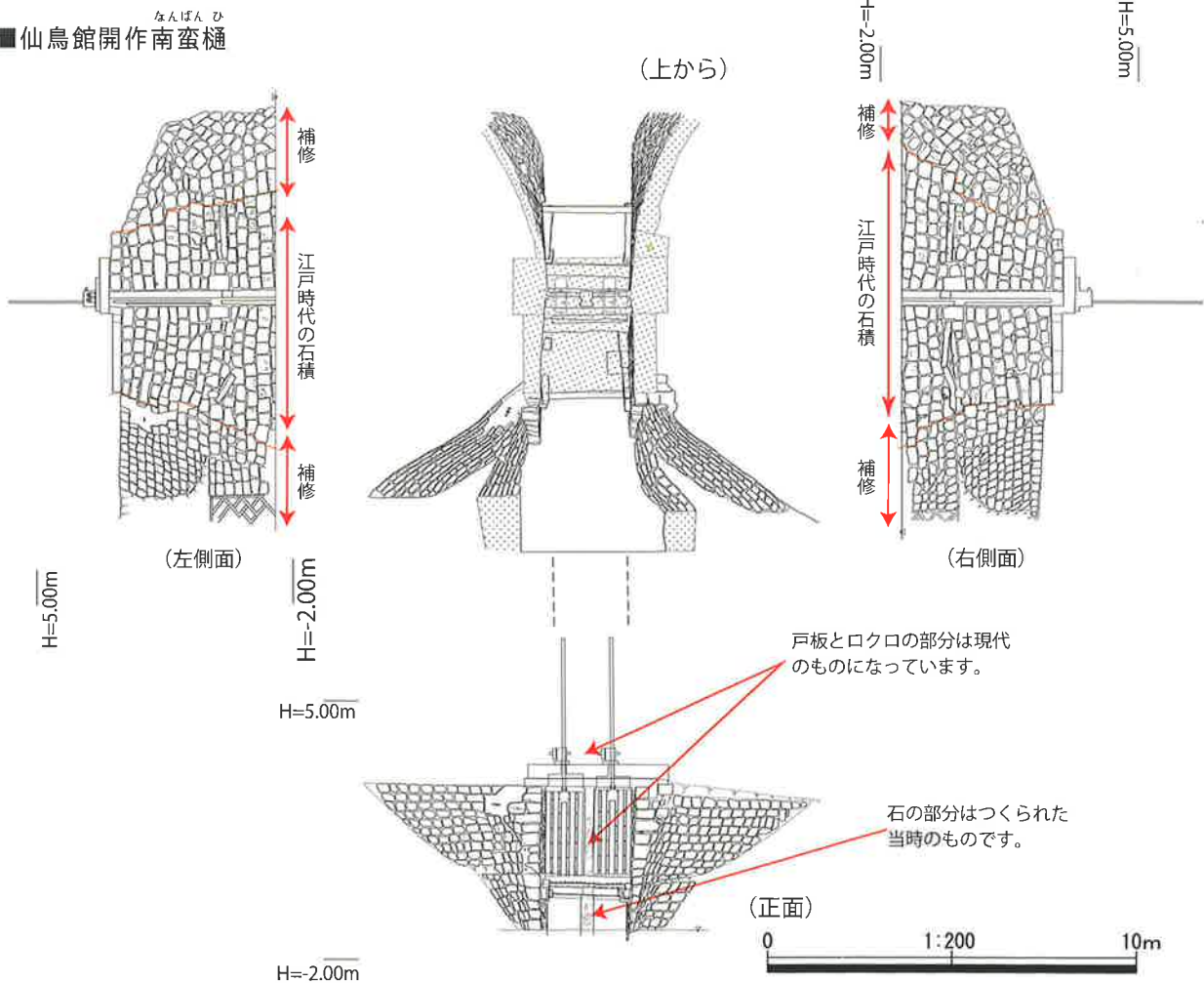
⑩ 一番堤防



■尾津開作南蛮樋



■仙鳥館開作南蛮樋



# 干拓樋門の構造

山口県内で江戸時代に造られた石の干拓樋門には、「唐樋」と「南蛮樋」の2種類があります。「唐樋」は戸板が水圧によって扉のように開いたり、閉じたりする構造の樋門です（写真1）。一方、「南蛮樋」は樋門の上部に取り付けられたロクロを回転させることによって、縄でつながれた戸板を上げ下げする構造の樋門で、平生開作（1658年）の堀川南蛮樋（写真2）や尾津開作（1810年）の南蛮樋などがあります。

樋門に使用された石は、岩国をはじめ瀬戸内海沿岸部で採れる花崗岩です。花崗岩は非常に硬くて耐久性があり、節理（規則的な割れ目）に沿って細長く切り出すことができるため、戸板を支える樋柱や横に架け渡す梁に使用するには最適でした。現在、江戸時代の干拓樋門を見ることができるのは、樋門に石を使用していた山口県など瀬戸内地方や九州地方だけです。石が採れない地方では、木を使用していましたが、耐久性がないため、何度も造り替える必要があり、今では残っていません。

（岡山大学大学院准教授 樋口 輝久）

からひ  
〔唐樋〕

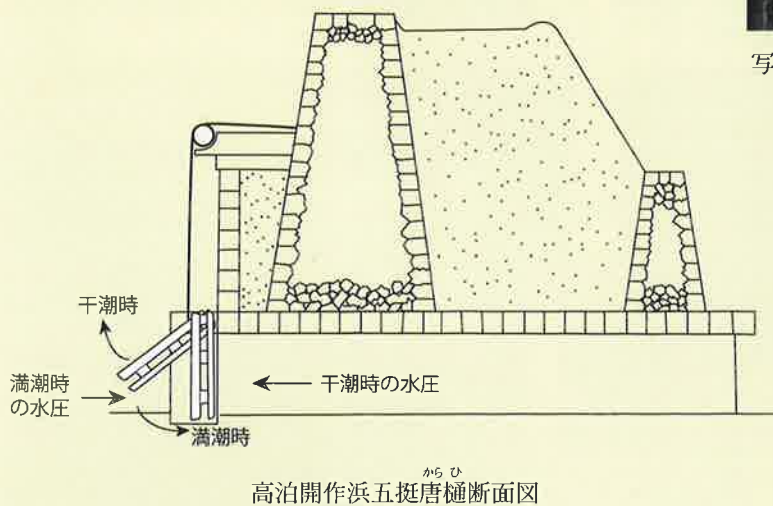


写真1 高泊開作浜五挺唐樋(山口県山陽小野田市)

なんばんひ  
〔南蛮樋〕



写真2 堀川南蛮樋(山口県熊毛郡平生町)



■満ち潮の時は戸板が水圧によって扉のように閉じる。引き潮の時は、逆に開く。

■ロクロを回転させることによって、縄でつながれた戸板を上げ下げする。